実践団体情報

記入日	西暦２０１９年1月１５日（２０１８年度のチャレンジプラン）
実践団体名	見てみようよ！常総市の会
代表者名	石川理司
プラン全体のタイトル	水害の記憶を未来につなげる『ステッカーツアー』運営
電話番号	0297-22-7332
メールアドレス	leaf@ninus.ocn.ne.jp;
実践団体の説明	常総市は 2015 年 9 月豪雨による鬼怒川本川堤防決壊により、市内が広範囲にわたって洪水となり、市民の暮らしは大きなダメージを受けた。水害の影響は現在も残り、復興は道半ばであり依然課題も多い。当団体は、水害から 4 ヵ月を経た 2016 年 1 月、常総市役所で、「たすけあいセンターJUNTOS」（当該活動の母体団体であり民設の復興のセンター的役割団体）により行われた復興を考える市民集会の中で、水害の記録を未来（次世代）に継承していく必要が発議され、その場に参加していた有志らが集まり立ち上げたものである。
所属メンバー	石川理司　染谷みどり　中村ゆきえ　古谷修一 佐藤孝俊　土屋衛治郎（立証大学） 他立正大学学生
活動地域	茨城県常総市
活動開始時期・結成時期	2016 年 1 月
過去の活動履歴・受賞歴	2016 年 1 月設立 同年 3 月　テストツアー 7 月　市内橋本町ツアーより」本格的活動開始 201 7 年　防災教育チャレンジプラン採択 2018 年　防災教育チャレンジプラン採択
プラン全体の概要	2015 年 9 月豪雨による水害被害の記憶を風化させない取組として、①水害体験の掘り起し　②語り部の発掘・育成　③街の各所における洪水高の記録表示（洪水水位高ステッカー表示）を一体のプロセスとした「ステッカーツアーコ－ス造成」を行う。

プランの年間活動記録

	プランの立案と調整	活動準備	実践活動
４月	開催地・年間計画決定		
５月		地元調整	
６月		下見等	
７月			新井木地区ツアー実施
８月		開催地決定	
９月		地元調整	
10 月			
11 月			自転車ツアー実施
12 月		地元調整	
１月		下見等	
２月			復興街中発見ツアー実施予定
３月			

プラン全体の反省点・課題・感想	201８年度は高校生を巻き込んだ継承仕組みづくりについて重点的に取り組もうと申請案を出したものの、高校生の巻き込みは様々なハードルがあり、正直進めなかった。地元高校のボランティア部も活動方向性が合致せず、なかなかに難しいと思い知らされた。一方で地域から新たな参加者が加入するなど好材料もあった。
今後の活動予定	上記のことから 2019 年度以降の、ステッカーツアーの形を変えながら、水害の記憶の継承とともに、地域を楽しみながら見つめるアングルでの取り組みを行い、少しずつ賛同者を増やしていくよう尽力したい。「被災の記憶そのもの」から「復興」や「復興に当たって尽力いただいたボランティアの顕彰」などに力点をずらしていく。これも水害を伝え続ける、広角的な視点である。そして最終的には、地域資源を楽しみながら水害と復興の歩みをたどれる常設コース「水害メモリアル回廊」を地域の参画者を得ながら構築していきたい。

実践したプランの内容と成果

記入日	２０１９年1月１５日（２０１８年度のチャレンジプラン）
実践団体名	見てみようよ！常総市の会
実践番号	１
タイトル	水害の記憶を未来につなげる『ステッカーツアー』運営
実践担当者のお名前	染谷みどり
実践にかかった金額	30 万円未満
実践の準備にかかった時間	数ヶ月
実践活動を実施した日時	西暦２０１８年5月～2019 年２月
実践の所要時間	３日間
実践の運営側で動いた人の人数	７人
防災教育の対象者の属性	大学生、地域住民・社会人/一般、防災関係者
防災教育の対象者の人数	約６０人
実践を行った都道府県と市区町村	茨城県常総市
実践を行った具体的な場所	新井木町内橋本町内
★実践に必要だった特定の能力を持った人・物品・ツール・知識等	ＰＣでの事務作業　映像記録

達成目標	「水害を記録にとどめない（痕跡を消し去る）復興」ではなく、「水害の記憶とともに生きていく復興」の実現のために、防災減災意識を高めることを達成しようとした。	
どの力を身につけようとしましたか？	知識・技能	かなり
	思考力・判断力・表現力	かなり
	学びに向かう力・人間性	大いに
実践内容・方法	街の各所における洪水高の記録表示（洪水水位高ステッカー表示）　を、会としてその場所の家主にはたらきかけ、その結果として理解が得られた各所において、「ステッカーツアー」（語り部にお話をうかがい、洪水水位ステッカーを貼って歩くスタディウォークツアー）を行ってきた。これは①水害体験の掘り起し　②語り部の発掘・育成　③街の各所における洪水高の記録表示（洪水水位高ステッカー表示）　を一体のプロセスとした「ステッカーツアーコース造成」が基になる。 これは市内外在住の一般や市内高校生による「ステッカーツアーコース造	

	成チーム」が、市内洪水被災地域を取材し、当時の記憶を語っていただける“語り部”を掘り起こすとともに、当該地域の洪水時水位を聞き出し、それをマップ化、その後、多くのツアー参加者を集めたウォークツアー（語り部のもとを訪れ各ポイントに参加者で水位ステッカーを貼って歩く『ステッカーツアー』）を実施運営するものである。	
得られた成果	水害の記憶の警鐘に関してはストレートな取組であることからインパクトも大きく、メディアに取り上げられ、地域の関心を得ることができた。水害の記憶を消し去るかのような復興の中で、地域の水害の歴史や地形的必然、川との付き合い方などを、我々自身が学んでいくツアーでもあり、深みを持って継承活動を進められたのではないかと思う。	
どのくらい身につきましたか？	知識・技能	かなり
	思考力・判断力・表現力	かなり
	学びに向かう力・人間性	大いに
課題・苦労・工夫	ステッカーツアーの原型は上記のように確立されているが、それだけでは裾野が広がらない。手法やテーマを変化させて、より広い層に受け入れられるよう試行した。水害の記憶の伝承の形は、まだまだ開発余地があり、それは単に教条的なスタンスだけでなく参加者の“楽しみ”の部分を多くして参加のすそ野を広げることが重要であるとあらためて認識した。	
★運営・実践の担当者が協力を求めた人や団体（関係者）について		
関係者の名前・団体名	立正大学地理学科	
関係者の説明	研究室として会運営にかかわっていただいた	
★この実践事例を通じてあなたが学んだことや誰かに伝えたいメッセージ		
伝えたい相手	他の水害被災地	
伝えたい内容	記憶の継承は被災体験等のマイナス面の記録だけでなく、ボラの活躍などプラス面も併せて伝えていくことで、活動を受け入れてくれる人を増やすことができる。	